

葬送文化研究会 会報

平成11年9月 第2号

会長あいさつ



天野 勲

第一号の会報が会の内外にて好評であると承り喜ばしい限りです。年二回の発刊を目指した成果が実り、第二号を各位にお届けできるということは葬送文化への関心の高さと研鑽の賜だと思います。昨年は葬文研に相応しい課題が多くありました。話題の葬儀・消費者の意識・グリーフ・ワーク・それと終末医療とホスピス等々・中国葬儀事情と国際的な研究発表など、会員の層の幅広いこと、厚いことが実証されたと自負できるでしょう。

また、私が携わる研究のライフケアである研修が行われたのは幸いでした。我が意を得たりというところでしょうか。六月研修では「お葬式大好き」と自称される会員若き学徒、山田慎也氏のご指導で国立歴史民俗博物館の見学。入館が初めてということもあり、見るもの、聞くこと、興味深く時間が過ぎるのを忘れてしまう程でした。古い時代の生活様式から現代の日常生活に至るまでの推移を学ぶ必要性を痛感した次第です。

研修の日玉と目していた青森県「山内丸山遺跡」。日本三大霊場「恐山」は是非訪れたいと思っていたので感無量でした。縄文時代の葬礼祭祀の趾、栗の木で復元された竪穴式住居。土の表面に見える子供の骨瓶が埋葬された穴。土の中に作られた大人の棺の模型・主食であった(?)とされる栗の実を食したといわれる「斎の場」等々遠い昔に想いを馳せることができました。また「恐山」は現代の葬送にて蔑ろにされている魂(靈)の存在を改めて認識させられた神秘的雰囲気が漂う地場であり、いずれにせよ両者とも葬送文化への想いを倍増させてくれたようです。葬送

文化と民俗の歴史・古代遺跡は一体のものであると意を強くいたしました。この想いは私だけでなく、同行の会員も同じであつたと思います。

古くから傳わる事例と検証と現代の葬送文化を二〇〇〇年以降に「傳世」する役目を背負いつつ葬送文化研究会をいつまでも存続させたいと望むものです。これから葬文研は研究を更に掘り下げていき、密度の濃い意見交換を行うために、分科会を設置していく方向に進めて行きたいと考えております。それには研究会は単なる「サロン」であつてはならず「名刺交換の社交の場」と化すことなく、努力を重ね、会員各位の叡知を結集して下さることをお願いする次第です。

最後に、過般「国立民俗博物館にて文部省主催の「生・老・死」についてのシンポジュームが開かれました。そのときのパネラー諸先生の発表も素晴らしいものでした。その会場で大正大学の藤井正雄先生とお話をさせていただく機会を得ました。そのとき先生が『葬送（儀）学会の設（創）立』を目指んでおられると言われておりましたが、葬文研にてもこれまでその話題がありました。先日の第二号編集委員会でも議論されました。遠い夢のような気もしますがそれに向つて一步・二歩前進することも念頭に置いても良い時期ではないかと思います。

第二号発刊に際し、寄稿された会員及び編集委員の方々に御礼を申し上げると共に、「愛」と「智」と「反省」が発展に繋がると確信いたし挨拶とさせていただきます。

(葬送文化研究会・会長)

目次

葬文研活動スナップ
野外研修会スナップ

平成十一年度活動計画一覧
これまでの活動報告一覧

会長あいさつ
葬儀の社会的意義

葬送学への道は遠いのか
黒子に徹する

葬送の新しい切口を

見えるものは見えないものにふれている
活動報告

一九九八年度活動

六月懇談会 葬儀の消費者意識について
七月定例会 「中国の葬儀」

九月定例会 「葬送文化の民俗を見る」
十月定例会 「東北地方の葬送文化と縄文遺跡」

十一月定例会 「葬儀用品の今と昔」
十二月懇談会・忘年会 「グリーフ・ワークについて」

一九九九年度活動と予定
一月懇談会 卒業生研究発表
二月定例会 終末医療の現場から：

三月定例総会 「ホスピスの現状と役割」

四月懇談会 「活動計画についての懇談と決定」

五月野外研修会

六月定例会 「墓埋法について」 横田 陸・稻村吉彦

天野	稻村
勲	吉彦
浅香	勝輔
5	5
柴田	上村
千頭男	聰
8	7
7	7
5	4
1	

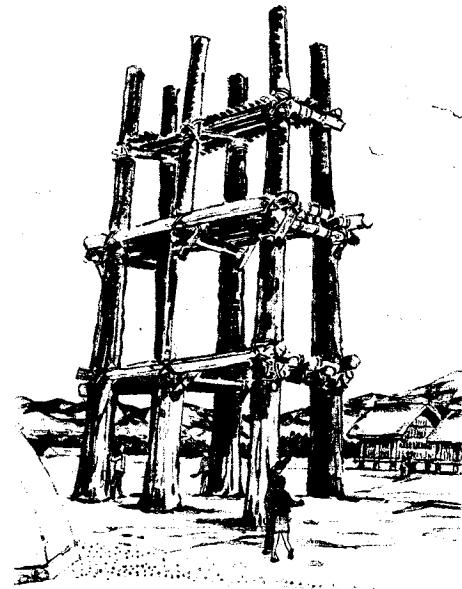
14	14	14	13	13	12	12	12	11	10	10	9	9	9
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---

高齢者医療ケア施設とまちづくり他	靈柩運送事業の責務とは
「セルフ・リストラクチュアリング」	私感・現代葬儀環境を考えてみる
会員名簿	沖夕暮れの恐山に想う
会則	雑文「葬送」

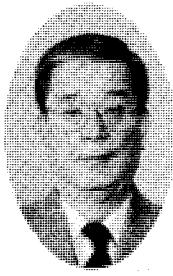
杉山	岩崎
勝山	浅井
下村	和隆
昌司	孝一
村田	針生
祐輔	秀一
宏則	侃

33	31	30	29	28	24	23	22	20	19	18	17	16	15
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

縄文・夢ろまん 三内丸山遺跡



葬儀の社会的意義



稻村吉彦

る内容を持っていて、阿部謹也（西洋中世史家）のいう「世間」に生存しているようだ。欧米の社会という概念には、「公」という部分がかなり存在するのに、我が国の「世間」には広がりを持った公の概念が希薄か全然ない場合もある。「世間」をもう少し拡大したものが、「世の中」となるのではないか。

近年、葬儀は不要であるとか、墓はいらないという人たちが増加していくよう見える。マスコミ等が特にそうした人たちを取り上げるためにもある。マスコミは珍しいことを競ってとりあげる性癖があるのでマスコミの論調を鵜呑みにはできないが、そうした人たちの意見も尤もな点もある。形骸化したセレモニーでは、真に亡き人を偲ぶという心が現在のやり方には忘れられている。葬儀場の時間の制約もあるが、時間がくれば「はい、一丁あがり」という流れ作業が、人生最後の儀礼には味気なさを感じるのかも知れない。

これは結婚式も同様な傾向で、何百人も集めて開かれる豪華なホテルの式場での披露宴が最近は敬遠されているらしい。地味婚などという言葉が流入り始めたのも、時代の流れなのだろう。

葬儀の意義は、第一に遺体の処理がある。第二に自分の属していた社会との決別の儀礼である。第三には遺族と、故人が今まで所属していた社会との新しい結びつきの機会である。

我々は、単独では生きられない。いつも誰か他の人たちの世話をなつて生存している。同時に自分もなんらかの型で他人のお役に立っている筈である。通過儀礼の種類も所属していた社会への結束の証明でもあるが、「社会」といったが、我が国には欧米でいうところの「社会」と少し異なる

実は、我々はこの世間の中で成長し、各自が自然に自己の所属する世間のルールを学習して身につけていくものらしい。自宅の近隣の世間、親戚知人の世間、会社に行けば会社という世間、さらに同じ職場の同僚という世間、あるいは趣味の仲間等の世間という重層的構造の範疇の中で生息している。自分の所属している世間の枠の中で生活する分には、ぬくぬくとして、大変居心地のよいものである。ここで世間論を詳細に展開する余裕はないが、我々日本人は農耕民俗であるから、集団があつて個人があり、歐米の社会では、個人があつてその集団として社会が成立している。個の取り扱いが反対になっている。我々日本人が仲間同志で旅行に出る際の傍若無人の振る舞いは、我々が常に仲間内を向いているため、他の人への配慮を忘れてしまうのも、仲間という世間のためかも知れない。都会に生活しようと農村に暮らすと、基本的には変わりがない。

我々は「世間」を無視して生存できないのである。世間が悪いとか、批判することはできない。何故なら、私自信がその中にどっぷりと浸っているからである。

葬儀は、その所属している世間に對して、最後の決別の儀礼であるから、何らかのけじめが必要である。どういう形式にするかは故人の考え方もあるうし、土地の風習も無視できない。自分では葬儀では不要と考えても、遺された家族や親戚が世間から指弾される場合を考慮すれば、自分の考え方や思想を遺族に押しつけるのはいかがなものかと思う。

ただ、現在の死に至る過程から、葬儀、さらに墓地にまで至る経緯を思

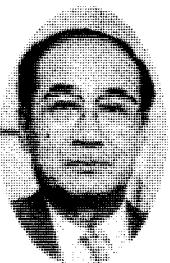
1. 0うと、遺族の精神的、経済的負担の重さに心が痛む。個人生活が時間に追われる忙しい現代にあって、故人との生前のさまざまな関係があるにしても、最後の告別まで時間に追われるのは、なんとも切ないのでないか。同時に、葬儀社任せの現在のあり方について、依頼する方で反省すべき点が多くあるように思う。慣習的な儀礼であるなら、せめて自分たちの葬儀のやり方を日頃から勉強する必要と努力が求められよう。

また、墓は不要であるという人も、同様に自己の存在は単独のものではなく、世間という連帯の中に存在しているのであるから、自分を取り巻くさまざまながらみから、良くも悪くも死後も開放されることはない。自分が祀られる権利を放棄しても、遺族の祀る権利は喪失しないのである。散骨した人の兄弟からこんな話を聞いたことがある。兄貴は自分で好きにやつたことだが、我々は兄貴の靈を祀りたいとき、どこを拝んでよいかわからない、我々兄弟が、兄貴の法事をやりたい、という気持ちはどうなるのか。海の彼方に葬ったといつても、どこを向いて礼拝するのか、我々の慣習に馴染まない方法でやられるといつもの亡き人を偲ぶという、あるいは法事を行って得られる、清々しい満足感が得られない。従来の墓が絶対とは思わない。そういう方式を否定するのではなく、どんな形式にしろ三十年は継続できるものが欲しいのである。

三十年というのは、世代の交代が一口に三十年といわれている。父親が三十年で亡くなるという意味ではない。日本人は、合理的なもの、より合理的な思想は、自分たち流に改善して、取り入れる才能を持つていて。我々の祖先は長い歴史の中で、大陸などの文化・文明を自分たち流に立て直し、今日の我々を育成されてきた。時代が激動する今日、未来を見据えた我々の新しい儀礼を研究する努力が必要になってきていく。

(ジャパンセメトリー・コンサルタンツ)

一 総論より各論を一



浅香勝輔

甚だ大雑把な感想を言うと、火葬場の伝統とは、優れた芸術と共通する、見せかけのない不退転の強味にある。私が葬送文化の中でも、特に火葬場の歴史に感興をもよおされるのも、それから来ているのではないか。愚かしい事の多い人生で一番貴重なものは、この不退転の強いものである。

数十年前、八木澤さんから誘われてこの葬送文化研究会を創設したときに、「葬祭学の確立を果たしましょうね」というような、誓いにも似た会話をかわした記憶がある。

葬祭学という以上、それは葬送文化に関する「知」と「技術」の研究・教育・創造の場でなければならない。教育の目的は一に有為な人材の育成にあるが、科学技術の急速な進歩や、それに伴う産業社会の複雑・高度化は、あらゆる分野で独創的な人材、高度に問題解決能力のある人材のニーズを惹き起こしている。高度職業人に対するニーズと言ってもよいであろう。

研究者も大学教員も高度職業人の一種と言えるが、違いは研究者や大学教員がより特化された専門分野での学術研究に従事するのに対し、高度職業人は実践的かつ総合的な知識技術を身につけ、実社会の諸産業部門に専

門家として従事されている点にある。

近年の福祉学や介護学の進展を見ても、従来の学問的体系の壁が、ずいぶん低くなっているし、そのような「垣根はずし」が必要だと考えている。

事実、私どもの学部の大学院に新設された医療・福祉工学専攻の時間割の中には、「動作補助工学」とか「マン・マシンシステム特論」とか「福祉機器特論」というような、耳目にも新しい、実践的にアカデミックな講座が進出してきてるのである。顧みて、わが葬送文化研究会の十数年を考えると、葬送理論の研究もさることながら、葬送上の各現象のどこまでを解明研究してきたのかというと失礼のそしりを免れないが、未だよちよち歩きの段階ではないか、と断言できる。

しかし、私はそれもやむを得ないと考えている一人である。というのも、葬祭業を主とされた商業の実践的活動に携わっておられる方々が多く、落ち着いて思索される時間が少ないことが要因であると考えられるからである。

だが、なすことなく、それをそのままに放置しておいたら、数年前の改革前の本会に逆戻りしてしまうことは必定である。会合のたびに相互の挨拶と情報交換に終始し、ハウツウもの的な発表が許容されてしまうということの再来も免れないであろう。

そこで、一つの提案をしたい。会員各自が時間的制約を認識し、方法論と言つ切り口を披瀝しないでそれぞれの方法論は毎回の討論会の意見交換のうちの解釈論という本論の中で自ずから明らかになるんだと言う理解が少なくとも必要であろうし、会の内容を高めていく良識でもあろう。方法論が大切ではないと言つてゐるのではないが、方法論とか切り口とか総論と言つたものに関心を向け続けていては、いつまで経つても、扱う内容の解釈論に達しないうちに、会合の時間切れとなってしまうのである。

二村さんがテキパキと司会をやられるようになつて、こういう弊害もし

だいに改められてきたが、それでもなお、自己の方法論をとうとう述べ出したり、総論部分で何がしの自己PRを流したりする会員も少なくなく。出席していてもイライラが募るばかりである。私としては、その人の解釈論が聴きたいのである。

いささか私事にわたつて恐縮であるが、私はここ二年有余、碑文谷さんの主宰されている『葬儀』という雑誌に、「火葬場のある風景」という連載を執筆している。担当は宗田さんというきわめて優れた女性編集者であるが、宗田さんとお会いしたのは、私の研究室で最初の執筆の際の十五分間ほどであった。

「全国の火葬場から選んでください」。「火葬場がこれからどうあるべきなど、学者先生の高邁なご意見などは結構です」。「通読してください」。読者の方が、火葬場の現状が分かるように、できれば記述で工夫してください」。「あとは先生を信頼して全部お任せいたします」。

圧倒された私は、やっと次のことは申し上げた。「現在各地に残存している木造の火葬場を中心に選びましょう」。「風土性と臨場感を重視して記述してみましょう」。

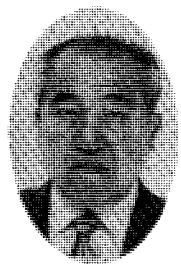
たったそれだけの対話で始まった、宗田さんと私の「解釈論」に私の責任は重い。

さいわい、福井の五十嵐さんや、長野の征矢さんをはじめ、各地の会員の各位にも励まされ、助けられて「もうしばらく続けてください」と、励まされている。これも葬送文化研究会会員としての余得であると、心から感謝している。

答があつたのはわずか数名にすぎなかつた。

(日本大学理工学部建築学科教授)

黒子に徹する



鈴木義久



上村聰

葬送の新しい切口を議論

思いもかけず、この度は幹事の末席に連なることに相成りました。

編集員から、新任の抱負をとのことです、とりたてて抱負というほど のものではなく、皆様方のご指導を頂きつつ、先輩幹事が少しでも負担が軽くなるよう黒子を努めたいと考えてるだけです。

私が葬送文化（というよりは葬儀業界）とご縁が出来ましたのは、前の 会社（株式会社エスト）に入社したことに始まります。それ以前の仕事 は、エレクトロニクス産業でしたから百八十度の方向転換でした。オーバー にいえば、目に入るものの、耳にするもの全てが新鮮であり、刺激的 で、やっと終の仕事に出会えた思いでした。何事もどん欲に吸収している 丁度そんな時期に、天野会長のお誘いがあつて、当会へ入会させて頂きま した。定例会、見学会、研修旅行と出来る限り都合をつけて参加してまい りましたが敷かれたレールに乗って行くだけで、幹事の皆様のご苦労に感謝 することを忘れていたことを恥かしく反省している次第です。

新体制となり、ますます幹事の方々の大変さを見るにつけ、せめて、そ のお手伝いをすることにより、当会の発展に寄与出来ることを嬉しく思つ ております。

今回、突然のご指名で幹事を任されることになり、正直なところ少々驚 いております。葬送文化研究会へは昨年11月11日の定例会から参加をさせ て頂いておりますが、私のような新米にこのような大役が来るとはまったく思っておりませんでした。

しかしながら、会報誌発行のお手伝いということですので、編集を生業 とする者として出来る限りのことはさせて頂きたいと思っております。ただ、数回のお付き合いの中で既にお気づきの方もいらっしゃると思います が、私個人は大人しい性格ではありませんので、やるとなれば言葉を発す る機会も少なくないでしょうし、時にはどなたかと意見が異なることもあります。

とはい、それぞれがプロの集団の会報誌を創るのでから、それなり の議論は必要ですし、議論の末に練り上げた結論がいずれ求められると思 いますので、その一助になれるよう努力したいと思います。

さて、私は祭典新聞には平成9年の7月に入社しました。その点から言 えば、葬送に関するジャーナリズムに関与してまだ2年ほどにしかなりま せん。しかし、私個人としましては、3年以上にわたりフランチャイズビジネス の専門雑誌の編集を現場の責任者としてまとめて参りましたし、マスコミ 自体は10年以上になりますので、葬祭業に関する知識は乏しくとも、取材

対象の見方というものははある程度分かることもあります。

何故、私が敢えて「フラワー」ではなく、「フラワービジネス」という言い方をするかと言いますと、花き産業（園芸種の花を取り引きする業界を表す言い方です。）では、「消費者に売るべき物は花その物ではなく、花のある豊かな暮らしである」ということをよく口にします。とは言うものの、正直なところ、これについては「言うは易し、行うは難し」と言つたところでしょう。

しかし、誰が仕掛けたかは別としても、消費者の生活の中には確実に「花のある生活」が広がっています。だからこそ、大手の企業がノウハウの吸収を含めて、大量の資本を投下してまで新規に参入しようとしているわけです。その最も身近かな具体例が「ガーデニング」のブームです。今では、切花専門だった生花店にさえも、花苗やちょっとした園芸資材が置かれているほどです。

さて、葬祭業についてですが、私が見る限り何やら花の業界にやたらと似ているのではないかという気がいたします。言葉の不適切を恐れずに申しますと、次のような点がそう思わせるポイントになっています。

①家族でやっている専業者が多い、②生業に近い規模で、経営基盤が脆弱な店が多い、③大手の異業種企業が「将来性のある市場」として新規参入を目指している、④業界内に統一した団体が確立していない（個別の団体は存在しているが…）、⑤消費者へのアピール力が弱い、⑥消費者のライフスタイルの変化に対応できていない、⑦業界内の縦系列の支配力が強く、柔軟な意見の交流が阻害される要因になっている、⑧新たな文化や施行方法などの提案力が弱い、⑨専門家意識が強く、基本的に素人の考えに耳を傾ける姿勢がないなどが挙げられます。

やや辛らつな言い方にはなりましたが、大手の資本力がある企業がその気になれば、かなり短期間で市場に浸透してくるのは間違いないことで

す。この点も花き産業と非常に似ていますが、そうした危機感のなさと意思統一の欠如が、気づいた時には手遅れという事態を招きかねないことを危惧しています。

特に、21世紀には少子高齢社会の急速な進展により、介護保険などを中心とした経済構造の劇的な変革が予想されています。それはつまり、今までのマニュアルが通用しなくなる可能性を持っているということを意味しているわけですが、その震源地として注目されているのは消費者の動きに他なりません。

葬送文化研究会は、メンバーの年齢も専門も肩書きも異なる人々で構成されており、垣根の低いフレキシビリティに富んだ団体だと思っていました。ですから、是非こうした議論を活発に行い、むしろ、業界のあるゆる人が難しい問題の解決を相談してくるくらいに、組織としての知恵を蓄える必要があるのでしょうか。

今は夢のような話かもしれません、いつかは本物になる時が来るはずです。多彩な才能を蓄積し、業界全体のライブラリーになることができたら、今、一部で起きかけている「葬祭学会」への具体的な足跡になるのではないかと期待しています。

私個人としても、全体の将来に貢献できる点を一つでも多く見つけて、微力ながらお手伝いをさせて頂きたいと考えておりますので、多角的な議論が活発に行われるよう一石を投じていきたいと思います。

（祭典新聞発行・株式会社東洋経済研究所）



活動報告 1998年6月～1999年6月まで

* 4月懇談会／5月定例会の報告は会報の1号に記載済み。

* 6月懇談会

討論テーマ

「葬儀の消費者意識について」

昨日、多くの消費者より葬儀に対する不満や意見を耳にする機会が多く感じられます。

また、一方では「葬儀ばなれ」現象も現れてきております。

現状の葬儀のあり方を、それぞれのお立場で検証していただき、自分なりのご提言やご意見のご発言をもとに、参加者全員で討論していただきました。

特に、実際の現場を担当されている関係者の貴重な体験や発言を数多くいただきました。

於：東京電機大学 1601号室

* 7月定例会 7月14日 東京電機大学
講演

「中国の葬儀」

講師..八木澤壯一氏

略歴・紹介

昭和12年新潟県生まれ。

東京都立大学大学院を経て、同大学教授。工学博士。
現在 東京電機大学工学部建築学科 教授

専門は建築計画・建築経済学。

中でも火葬場建築に関しては第一人者。

日本建築学会賞受賞。著書に「火葬場」（共著）・「建築企画論」

「墓からの自由」（共著）他多数。
葬送文化研究会 発起人顧問

今回、特に中国での火葬場建設事情を通して、現地で行われている葬送に関して、独特な切り口、また工学者としての観点から、葬送の文化につわるご講演していただきました。スライドを交えて貴重な映像を見ることが出来ました。

*9月定例会 9月8日

国立歴史民俗博物館

日帰りの野外研修を行いました。

研修テーマ

「葬送文化の民俗を見る」

案内役 山田慎也 氏（同館 研究員）

このようなテーマで歴史民俗学博物館を訪ねました。

本年2月に「葬具とその由来」を定例会にて講演をいただきました山田氏は、ご存じのように葬文研会員の中では、若手の学術研究者のおひとりです。

大阪にある国立民族学博物館より歴博に転任され、何かとお忙しい中を訪問させていただきました。見学は現地到着後、全館のガイダンスをした後、特に歴博では、縄文から弥生、そして古墳時代に至る埋葬や墳墓の形態のほか、第4展示室を中心とした民俗関係の中で、古来よりの葬送文化が判りやすく展示してありました。

そこを山田氏のご案内で見学し、その後研修室にて座談会を行いました。

*10月定例会

10月11日～13日の2泊3日 青森県

研修／親睦旅行

「東北地方の葬送文化と縄文遺跡」

行程表

10月11（日）

9.. 15 羽田空港 出発ロビー集合
9.. 45 発 日本エアシステム213便
10.. 55 着 青森空港 専用バス乗車 ・・松江葬儀社 専務・松江英
寿氏と合流

12.. 11 三内丸山遺跡 見学
12.. 20 移動 昼食郷土料理じゃつぱ汁
野辺地から陸奥湾経由 下北半島

17.. 00 恐山見学・・・独自の死者儀礼と葬送観念を検証
宿泊 下風呂温泉マリンホテル

松江専務から東北の葬祭事情などレクチャー／交歓会

10月12（月）

17.. 12 .. 00 30	8.. 00	出発 佐井から仮ヶ浦遊覧／本州最北端 大間崎経由
		川内ダムの紅葉見学
		昼食 むつ市／途中各所見学
		宿泊 八甲田山麓の秘境・酸ヶ湯温泉 懇談会

10月13
(水)

8:00 出発 十和田湖経由
昼食 鹿角で秋田名物 きりたんぽ鍋
16:15.. 発
17:20 着 秋田空港より帰京
羽田空港 解散
角館散策

* 参加者（敬称略 順不同）

天野 勲	葬文研 会長
荒木由光	(有)アラキ 社長
浅井秀明	(株)出雲殿 取締役
伊藤桐人	(株)いとう 取締役
佐々木照和	(有)佐々木博善社
下村 倪	(株)いのうえ
杉浦昌則	(株)セレマ 社長
杉浦真也	(株)セレマ 杉浦氏子息
鈴木義久	(株)エストワン取締役
茂登山正人	(有)茂登山商店 社長
二村祐輔	(有)セピア
勝山宏則	(株)大成祭典 取締役

現地参加

松江英寿氏 (有) 松江造花仏壇店 専務

オブザーバー参加

ニコレットさん

ミチコちゃん (共に出雲殿 浅井氏ご家族)

*11月定例会 11月11日 東京電機大学
講演テーマ

「葬儀用品の今と昔」

講師.. 天野 勲 氏

葬文研会長.. 東京につそう社長

会長の天野氏による葬祭用品の変化を交えて葬祭現状の時代変遷などを
中心に、お話をいただきました。

葬具の持つ意味やその使い方など、時代と共に大きく移り変わっています。

長年にわたり葬儀用品の問屋を営んでこられた経験や実務から、全国各地いろいろな葬祭の移り変わりを見てこられたことから、葬祭現状の問題を踏まえて、出席の皆様方からのご意見も伺い、討議、懇談も活発になりました。

*11月には国立歴史民俗博物館で

国際シンポジウム「生・老・死..日本人の人生観」が開催され、
天野会長をはじめとして、多くの会員が参加させていただきました。

天野

1999年

* 12月懇談会・忘年会 12月16日

駒込 天然寺（後藤住職（葬文研会員））

懇談討議

「グリーフ・ワークについて」

葬送の機能として近年、注目されている「癒し」の取り扱いにそれぞれ

のご見解を述べていただきました。

その後、天然寺後藤住職のご配慮により、客殿にてにぎにぎしく忘年会を行いました。

1998年 計報お知らせ

*当会会員 和田篤泰氏（（株）和田 代表取締役）ご尊父様ご逝去。

12/25通夜・葬儀辻堂の同社斎場にて会長が代表して会葬させていただきました。

*当会会員 後藤尚孝氏（天然寺 住職）ご母堂様ご逝去。

12/25本葬 同寺にて 会長・顧問・事務局が代表して会葬させていただきました。

「都心部における寺院墓地及び

靈園供給の現状とその可能性について」

—文京区小日向地区のケーススタディー

同 研究室・山口加奈子氏

3名による、研究内容報告とこれから抱負など述べていただきました。
ご出席の皆様の手厳しい中にも暖かいご指導・ご支援をいただきました。

* 1月懇談会 1月26日 東京電機大学

卒業生研究発表（プレゼンテーション）

*「納骨堂・墓苑にたいする設計者の意識と
デザインモチーフについて」

東京電機大学 八木澤研究室・加藤 篤 氏

*「葬送方法と葬儀形態の動向について
—新聞死亡記事の分析—」

同 研究室・田中欣也 氏

* 2月定例会 2月20日 東京電機大学

講演

終末医療の現場から・・

「ホスピスの現状と役割」

講師：谷 荘吉 氏

大阪寝屋川 小松病院院長 ・ 1931年 神奈川県生まれ。

横浜市立大学医学部卒業。東京大学大学院博士課程修了。東京大学助教授、金沢医科大学教授、日本厚生團衛生科学研究所所長などを経て、1991年より上尾甦生病院副院長・ホスピス病棟長、1994年より横浜甦生病院副院長・ホスピス病棟長。

日本医学協会理事、「死の臨床研究会」世話人、「生と死を考える会」副会長、「全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会」監事、「ホスピスを考える横浜市民の会」幹事、その他多数の学会員。

訳書に「臨死患者」（広川書店1978）、論文に「末期癌患者のケア」（今日の医療方針、1980 医学書院）「Death Education」（末期癌の医療 1986 金原出版）「やすらぎのあるホスピスをめざして」（がんの苦しみが消える 1994 三省堂）、共著に「日本のホスピスQ&A」（東京書籍 1995）など多數。

ホスピスについての一般的な知識を理解していただいたと共に、生の最後にかかる研究や業務をしている私たちにとって、死への橋渡しがどうなされているのか関心も高く多数の出席をいただきました。

特に「ホスピスにおける死のみとり」から・・

ホスピスケアの概要

ホスピスケアの特徴

ホスピスにおける日常生活

ホスピスにおける死の受容

ホスピスにおける死のみとり・・とスライドを交えながらの講演をいただき、谷先生の多岐に渡るご活躍から先生のお人柄、人生観などもしみじみと伺い知ることが出来大変、勉強になりました。

谷先生は当会員出口氏（おふいす でぐち）のご尽力によりお招きが出来ました。

今後も医療現場からの講演も定例化して行きたいと思います。

* 3月定例総会 3月26日 東京電機大学

定例総会では、本年度活動の総括議事と来年度活動計画などをテーマとして検討しました。

次 第
開 会
会長挨拶

総会の案内と進め方のお願い・・事務局
議長選出

定数確認報告／議決定数確認

議事 第1号議案 平成10年度活動報告に関する事項

第2号議案 同 収支決算に関する事項

第3号議案 平成11年度活動報告に関する事項

第4号議案 同 収支予算に関する事項

第5号議案 役員改選等に関する事項

第6号議案 その他の事項

98年度の活動・収支についての報告と承認。
99年度の活動・予算についての決議がなされました。

役員改選につきましては、現役員・幹事等留任。

「第3期運営体制役員名簿」巻末会員名簿に記載。

総会にて新幹事2名任命、承認されました。

鈴木義久氏・・(エスト・ワン 99年6月退社)

上村聰氏・・祭典新聞

*5月野外研修会（定例会） 5月22日

埼玉県春日部市

見学場所 末広製作所・・白木祭壇や木工葬具の製作現場を見学しました。

*6月定例会 6月11日 千代田万世会館

(千代田区 秋葉原)

講演テーマ

「墓埋法について」

講師 横田睦氏

(葬文研幹事・工学博士)

稻村吉彦氏

(葬文研監査・ジャパンセミトリーコンサルタンツ代表)

*4月拡大幹事会併設懇談会 4月20日

東京電機大学

懇談テーマ

99年度「活動計画についての
懇談と決定」

先頃、改正された「墓地、埋葬等に関する法律」についての解説や問題点など。加えて葬祭の現状からみた埋葬についての所感などを講演していました。

今期の活動を詳細に話し合い、拡大幹事会として活動内容の決定議決権を総会で委ねられましたので、4月から第3期の活動を検討しました。

活動予定は報告末尾のページに一覧記載。

*次頁に活動案をたたき台として、呈示させていただきました。

* 7月定例会 7月16日 東京電機大学

講演

「ヨーロッパの葬儀」

講師・八木澤 壮一氏

略歴・紹介

昭和12年新潟県生まれ。

東京都立大学大学院を経て、同大学教授。工学博士。

現在 東京電機大学工学部建築学科 教授

専門は建築計画・建築経済学。

中でも火葬場建築に関しては第一人者。

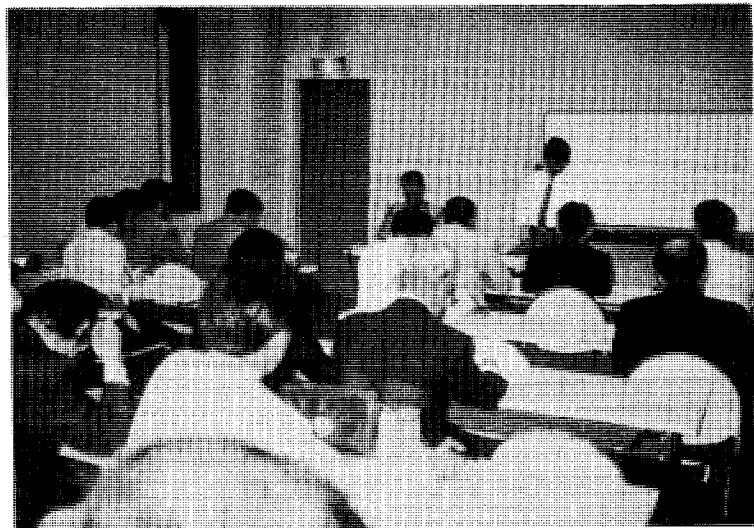
日本建築学会賞受賞。著書に「火葬場」(共著)・「建築企画論」

「墓からの自由」(共著)他多数。

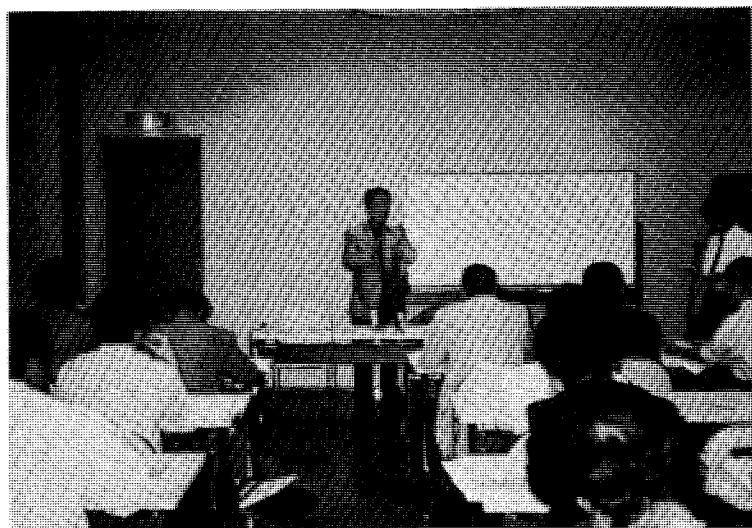
葬送文化研究会 発起人顧問

昨年は中国での火葬場建設事情を通して、現地で行われている葬送に関して、ご講演していただきました。今回はヨーロッパ、特に北欧への現地視察を通じて当地周辺の葬祭事情についてご報告、お考えをお聞かせ願えればと、思っております。

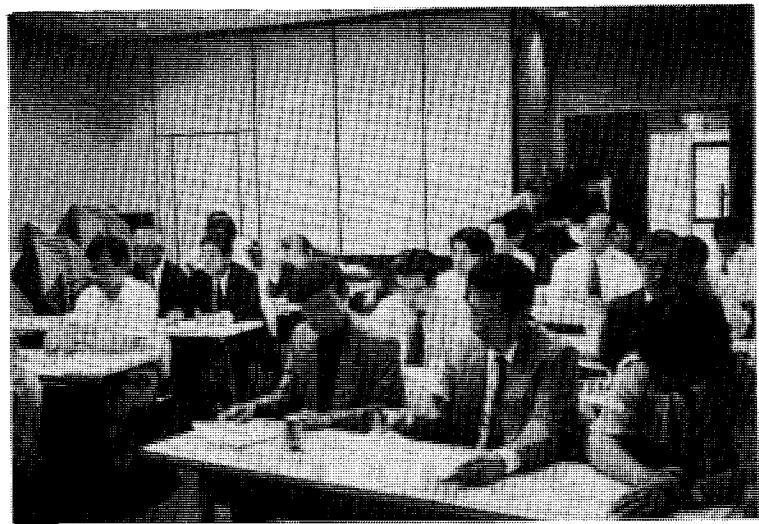




葬文研活動スナップ（1）



葬文研活動スナップ（2）



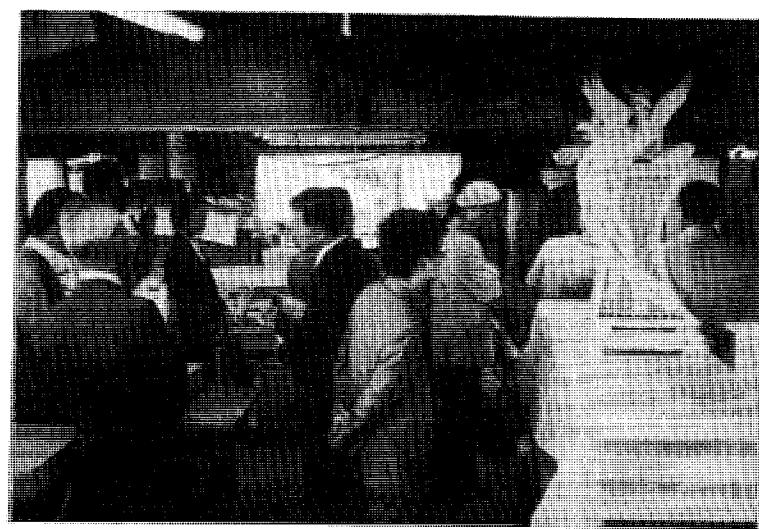
葬文研活動スナップ（3）



野外研修会スナップ（1）



野外研修会スナップ（2）



野外研修会スナップ（3）

◆平成11年度活動計画一覧（一部予定等を含みます。）

日 時 予 定	会合名称	講演／討論テーマ・講師・・等 予定・案
4／20 (火)	懇談会	拡大幹事会併設 99年度「活動計画についての懇談と決定」 東京電機大学
5／22 (土)	野外研修 事前出欠	白木祭壇・葬具類の工房見学・・・春日部市 「末広製作所」を訊ねて
6／11 (金)	定例会 事前出欠	講演：「墓埋法について」 講師：横田 瞳氏 全日本墓苑協会 主任研究員 稻村吉彦氏 ジャパンセミトリーコンサルタンツ
7／16 (金)	定例会 事前出欠	講演：「ヨーロッパ葬祭現状報告」 講師：八木澤壯一氏 東京電機大学 教授
9／ () 日にちは未定	定例会 事前出欠	「インド葬祭報告」（仮題） ・・約1ヶ月に及ぶ調査から・・ 講師：山田慎也氏 歴史民俗博物館 研究員
10／13 (月) 14 (火) 15 (水) 2泊3日	研修旅行 事前申し 込みと 費用入金	「瀬戸内の葬儀事情と斎場を訪ねて」 岡山県倉敷市（株）いのうえ訪問 講師：井上峰一氏 （株）いのうえ社長 下村 侃氏 同 儀礼研究所所長 香川県「しづかの里」火葬・斎場見学 案内：八木澤壯一氏 東京電機大学教授
11／17 (水)	懇談会	「葬儀社 vs 付帯関連業者・本音のトーク」（仮題） コーディネータ：杉浦昌則氏 （株）セレマ社長
12／ 3 (金)	定例会 忘年会 事前出欠	パネル講演「宗教界と葬祭業界」（仮題） 講師：上村敏文氏・後藤尚孝氏・三浦正信氏（予定） *忘年会参加者は会費徴収
2000 1／21 (金)	懇談会	恒例により研究室卒業予定者の卒論をテーマに プレゼン懇談
2／17 (木) (予定)	定例会 事前出欠	「みとり」からの報告 看護婦研究学会から講師招聘 予定
3／23 (金)	総 会	定例総会 東京電機大学

これまでの活動報告一覧 新体制設立から・・

1997

日 時	活 動	内 容	講演者	開催場所	参加人数
2／10	幹事会	総会の打ち合わせ		東京電機大学	10名
2／12	総 会	新旧体制引継		東京電機大学	45名
3／14	幹事会	定例会年度計画		東京電機大学	8名
4／17	定例会	「台湾の葬祭事情」	天野氏	万世会館	52名
5／22	幹事会	運営会議		東京電機大学	7名
6／17	定例会	「県境を越えた火葬場」	浅香氏	東京電機大学	40名
7／ 8	幹事会	講演者事前打ち合わせ		天然寺	4名
7／22	幹事会	伝通院事前挨拶		伝通院	4名
8／ 5	幹事会	運営会議		東京電機大学	7名
8／21	定例会	斎場見学／ 「宗教者から見た現代葬儀」 後藤氏		織月会館	50名
9／23	研修準備	事務局事前視察・挨拶		沖縄	1名
10／ 4	幹事会	研修旅行打ち合わせ		東京電機大学	8名
10／12	沖縄研修				
~14	定例会	「沖縄の葬祭現状」 仲西氏／城間氏 「琉球文化と葬祭」 親泊氏／比嘉氏	沖縄残波ロイヤルH 琉球料亭 みらく		17名 20名
11／10	報告会	沖縄研修報告会		東京電機大学	12名
12／10	定例会	「現代墓地靈園事情」 稲村氏		東京電機大学	40名

1998

2／ 3	幹事会	総会打ち合わせ		東京電機大学	6名
2／13	総会／定例会	「葬具とその由来」 山田氏		東京電機大学	38名
3／ 5	幹事会	98年度企画・活動予定打ち合わせ		東京電機大学	9名

* オブザーバーでのご参加はのべ20名くらいになっています。

* 1998年度 定例会・懇談会 一覧

日 時	会合名称	講演／討論テーマ・開催場所・講師
4／13（月）	懇談会	話題の葬儀について *会報1号に記載
5／12（月）	定例会	環境問題と葬祭業界 *会報1号に記載 講師：荒井保男氏 日本エルツー（株）代表
6／ 9（火）	懇談会	葬儀の消費者意識について
7／14（火）	野外研修	東京電機大学 千葉県佐倉 国立市歴史民俗学博物館場見学 講師：山田慎也氏
9／ 9（水）	定例会	中国の葬儀 東京電機大学 講師：八木澤壯一氏
10／10.11.12 (土・日・月)	研修旅行	東北の葬儀と三内丸山遺跡を訪ねて 青森県 講師：松江葬儀社 松江英寿氏
11／11（水）	定例会	葬儀用品の今と昔 東京電機大学 講師：天野 勲氏
12／16（水）	懇談会	グリーフ・ワークについて／忘年会 天然寺
99.1/26（火）	懇談会 「八木澤 研究室 卒 論 発 表」	納骨堂墓苑に対する設計者の意識とデザインモチーフについて 八木澤研究室・・加藤 篤 氏 葬送方法と葬儀形態の動向について －新聞死亡記事の分析－ 同 研究室・・田中欣也 氏 都心部の寺院墓地及び靈園供給の現状と可能性について 同 研究室・・山口加奈子氏
2／20（土）	定例会	終末医療とホスピス 東京電機大学 講師：谷 荘吉氏（大阪寝屋川 小松病院院長）
3／26（金）	定例会	定例総会 東京電機大学

葬文研・研修旅行

みちのくレポート



浅井秀明
穂

青森というと本州最北県で、演歌歌詞中の青函連絡船の発着所、恐山ぐらいか知識の無かった私には、大変魅力のある研修内容で一も二もなく参加通知を出していた。羽田空港発の日本エアシステム213便にて空路青森空港へ向かい11時ごろに到着した。空港から貸切バスにて早速、三内丸山遺跡を見学した。ここでまず目につくのは復元された大型掘立柱建物で、重機械等がない古代においてこのような大型の建造物をどうやって建設したのかという素朴な疑問を持った。この遺跡は縄文時代前期から中期（約5500年前～4000年前）の大集落跡や平安時代の集落跡（約4000年前）、中世末（約400年前）の城館跡からなっている。

葬送文化研究上も興味深いのは、子供の墓（埋設土器）と、大人の墓（土杭墓）は別々の場所に設置されていて、子供の遺体は、丸い穴を開けたり、口や底を打ち欠いたりした土器の中に入れられ住居の近くに埋葬されている。今まで880基程調査されている。また、大人は、地面に掘られた橢円形や小判型の穴に埋葬され、谷の東側に同じ方向を向き南と北の二列に並び、道路を挟んで向かい合うように配置されていて、約220基が調査されている。案内してくれたボランティアの人の話によると、子供は、大人と比べて遺体数が多く、子供が生き延びるのは非常に困難であった。そして心情的に家の近くにおいて置きたいということで、子供の墓は

住居の近くにあると考えられる。また大人の墓も、海路からのお客様を迎える花道に配置してあり、死者を忌み嫌うのではなく、先祖として尊敬していたことがうかがえる。どちらかと言うと、葬送儀礼で遺体を忌み嫌う風習を多く見てきた私には新鮮ですがすがしい思いのする遺跡であった。

そして、昼食に青森の郷土料理「じゃっぱ汁」（「じゃっぱ汁」とは、鱈の内臓や、骨等をいっしょに煮てしまい、大根等の野菜が入った汁でコクがあるのにさっぱりした後を引くおいしいスープ）を味わった後、一路

バスで国定公園下北半島にある今回の研修の日程でもある日本三大霊山のひとつ恐山へと向かった。夕暮れということもあって恐山は、おどろおどろしい霊の存在を感じずにはいられない雰囲気であった。862年慈覚大师円仁によって建立された地蔵堂の横を通り、片道約20分かけて、宇曾利山湖にたどり着く。その道の途中無間地獄、血の池地獄を通つて賽の河原、極楽浜につく。湖は、コバルトブルーで道のいたるところもちろん湖にも、水蒸気が上がり硫黄の黄色と水子の風車が目立つ。地蔵堂に帰つてきたころにはすっかり日も暮れて、肝試しに近い雰囲気となつていた。また、恐山を訪れる巡礼が、テントのようなものにはいって野宿していたのも他の寺院には無い特徴である。

そして、ホテルにて地元葬祭業者さんの資料を元にした勉強会を兼ねた懇親会が催された。その資料によると、青森県全域の特色として、納棺、出棺、火葬（ここまでが仮通夜）、そして通夜、葬儀、法要（四十九日、百か日）、納骨、お斎と続く習慣で仮通夜まではごく身内、通夜が会葬の大半で、葬儀式はごく身内のみと言う形式で行われる。つまり死者は会葬者の目に触れる事は無いのが際立った特徴である。また、祭壇は30万円から40万円、葬儀料金総額120万円から150万円位の価格帯といふことで、中部地区とそんなに変わらないという印象を受けた。宿泊先のホテル街では、正一位稻荷大明神の秋祭りが行われていた。

このお祭りは、神輿か何かを神社に奉納する祭りのようで、内容については良くわからなかつたが、神社でお酒をご馳走になつた。

二日目は、本州最北端大間崎で「ここ本州の最北端」と記された石碑とマグロのモニュメントの前で記念撮影後、目的の仏ヶ浦へと向かう。仏ヶ浦へは佐井港から高速船ニューしもきた号で、片道30分位の遊覧をする。国の天然記念物で風化侵食された山岳が海岸線に並びその形が、仏の形に似いて、壯觀な眺めである。また、10月の体育の日の近辺の1年中で一番良い気候と海風ときれいな空気がとても気持ちの良い遊覧であつた。佐井港に戻り、昼食後、八甲田山へと向かつた。ここでは、映画にもなつた、雪中行軍遭難の記録が残っている記念館を訪れた。1902年日露戦争の開戦2年前に八戸に上陸するロシア軍を迎撃つ想定で軍事演習を行つた弘前第八師団青森歩兵第五連隊が猛吹雪で210名中11名の生存しかなかつたという悲惨な遭難が記録されている。しかし、生存者がよくいたものだと思つた。

バスは、夕暮れ迫る中、宿泊先の酸ヶ湯温泉へと向かつた。湯治場の宿ということで宿泊の部屋自体は雑魚寝に近いが、千人風呂と呼ばれる白濁した湯の（千人は無理でも百人は入れそうな）大風呂で、しかも混浴というのが特筆すべきところである。男湯、女湯と入り口が分かれているが、衣服を脱いで浴室に入ると中の温泉は混浴である。総ヒバ造りの風呂桶の中央を仕切つて杭が2本あり、そのラインが男湯と女湯の境である。そこから50センチも女湯のほうに入ると、おばさんにすかさず注意される。この湯は飲めるということなので飲んでみると、酸ヶ湯の名の通りとってもすっぱい水で、朝夕2回までカップ半分程度を飲むと何かに良いということだったが、とても1日2回も飲める味ではなかつた。温泉が好きな人はぜひ行く価値があると思う。夕食は前述の地元葬儀社の方と親交を深めた。

最終日は、十和田湖経由で、楽しみにしていた奥入瀬溪流に向かう予定であったが十日程前の台風で道がふさがれていて散歩道が散策不能とのことで、十和田湖を一望に見渡せる御鼻部山展望台にて写真撮影をした後、十和田湖を散策した。十和田湖は観光地であるが、湖底の石まで、見えるほどきれいな水で、肌寒いくらい空気がすんでいるきれいな湖であつた。昼食には、これも一度は食べてみたいと思っていた秋田名物きりたんぽ鍋である。ステップは、秋田産地鶏の骨出汁で醤油味の甘め、ご飯をすり鉢で半漬しにして竹に突き刺し炭火の遠火で焼いたものを、汁の中で煮て食べる。シンプルで素朴な料理だが、とてもおいしかつた。秋田にいく機会があつたらぜひまた食べたい料理である。昼食後、2泊3日の有意義な研修旅行は最終目的地である角館へと向かつた。

角館は、江戸時代の武家屋敷の町並みが残る観光地で一軒一軒はかなり大きめである。観光地らしく大勢の人通りが、秋田にいることを忘れるようであつた。バスは秋田空港に向かいバス中にて解散の挨拶が行われ研修旅行は終了した。15時45分発日本航空556便にて羽田空港へと帰途に付いた。本当に楽しく有意義な研修であつた。企画してくださつた日本葬祭アカデミーの二村さん、子供の面倒を見て頂いた天野さん、（株）セレマの杉浦さんには特にお世話になり有難うございました。

(出雲殿)

ミチノクレポート



勝山宏則

近頃は日本全国で考古学的な新発見が相次ぎ、また、にわかに考古学ファンやマニアを全国に作り出しているようです。私たちが訪ねた三内丸山遺跡もそんな好奇心旺盛な人たちでごった返していました。名物のタワーも高床式や堅穴式の建物もすべて再現ではありますが、ものすごい迫力でした。整理整頓された資料館があり、ボランティアの方が常駐し、史料の整理や修復にあたっていました。ごみ捨て場の跡地やタワーの土台などはきれいに掘り出され風雨にさらされないよう屋根をつけたり、ガラスをはじめたりして整備されていました。教科書が変わってしまうほどの内容であることもさることながら、関心の高い人の多いことが研究の推進力となると理解しました。

今回の葬文研の旅行は東北地方、特に青森県での研修でした。東北というと針葉樹の森のイメージ、そして、冬の厳しい気候をイメージします。かつて、自分が春先に十和田湖を訪ねたときは杉の花粉がものすごく、花粉症の人間にとつてはいやな印象しかありませんでした。ところが結果は多くの発見また出会いで東北のイメージが反転しました。

さて、三内丸山遺跡の栄えた時代は、青森は気候が温暖で水に恵まれた広葉樹の茂る楽園だったようです。そこでは我々現代人がイメージする縄文人とはまったく違う、文化的で精神的に豊かな人々が生活していたよう

です。たくさんの堅穴住居跡、大型堅穴住居跡、掘立柱建物跡、大量の遺物がすてられた谷、大規模な盛土、大人の墓、子どもの墓、土器作りのための粘土採掘穴など。また、谷から見つかった動物や魚の骨（鯛の三枚おろしもあつたそうです）、植物の種子や花粉から当時の豊かな食生活がうかがえます。さらに、ヒスイ、コハク、黒曜石などから遠方との交易、漆器などから専門的な技術者のいたことがわかります。

私たちの興味はやはり、埋葬方法です。大人の墓は約220基、子どもとの墓は約880基も発見されました。大人の墓は谷の東側に、子どもの墓は住居のすぐそばに土器に入れて埋葬されたようです。先祖に対する思いやりや、亡き子ども達が寂しがらないようにという配慮がみてとられ、ご先祖さまたちは立派だったと感じました。

葬儀を儀式としてとらえて勉強する場合、現在は仏教を学ぶべきでしょう。なぜなら九割以上の家庭が仏式で葬儀を出しているからです。しかし、なぜ葬儀をするのかという疑問にはもとと原始的な感情、死者や遺族を悼む気持ちが原動力だと思います。葬儀があれば、全国から親しいものが集まるのは儀式のやり方がそうさせているわけではないのです。もちろん仏教が普及する以前の儒教的な考え方や、やおよろずの神々も死者や先祖を大事にしていたとは思いますが、四千年前の日本人が死者を大事にしていたことを知り、とても嬉しく、本当に誇りに感じています。

さて、時代を現代に戻して、遺跡のあとは忍山を訪ねました。到着が遅れて、4時半につきましたので、夕暮れのなか、カラスたちが旋回飛行する靈山は本当に靈験あらたかな感じをうけました。こんな靈場が身近にある人たちには、靈魂を身近に感じができるのではないかと思います。

温泉の多い東北ですから、宿泊は二泊とも温泉です。一泊目は下北半島突端の下風呂です。二泊目は湯治客の大変多い酸ヶ湯（すかゆ）です。下

風呂では、予定には入っていませんでしたが風間浦村の祭りに参加することができました。船型の山車をつかった祭りです。我々旅行者にも参加させてくれました。何より、むらの子供たちが積極的に盛り上げているのが印象的でした。高校生が山車の上に立ち誘導をし、小学生は山車の中で笛太鼓を担当します。村人が一体なり、文化を継承している姿を見て感銘を受けました。

松江造花仏壇店の松江専務と坂本さんには旅行中ずっと添乗していただき本当に助かりました。特に東北地方の葬祭事情や東北人気質について貴重なお話を聞くことができました。また、企画を立ててくださった二村幹事には何から何まで面倒を見てもらいありがとうございました。

(大成祭典株式会社)

参考文献

三内丸山遺跡の復元

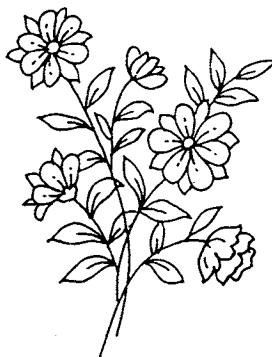
大林組プロジェクトチーム

学生社 1998

北のまほろば（街道をゆく41）

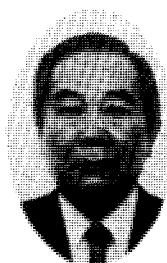
司馬遼太郎

朝日新聞社 1995



沖夕暮れの恐山に想う

下 村 倪



平成10年の秋の葬文研・研修旅行が実施され、はるばる岡山から飛行機で羽田に飛び、一行に参加随行した。行く先は本州の北端青森県へ。天野会長がこの研修旅行のレポートをすでに祭典新聞に発表されているので、私の記憶の中で鮮明に残っている恐山についての感想記を発表してみたいと思う。

恐山へ行くには、青森市から車で約4時間はゆうにかかる。関西、中国地方とは違った東北の民家の造りに注目した。

やはり、冬期の降雪に対応した屋根ぶきに異国を感じさせた。南と北に住む日本民族の暮らしに思いを馳せながら、午後5時頃、一行を乗せた専用バスは恐山に到着した、すでにあたりは夕闇が迫っていた。

恐山の呼称は、正式には宇曽利という。海拔879m、那須火山帯に属す死火山。中央のカルデラ（火山の噴火で出来た円形の陥没）は火口湖で、美しく静かな湖面であった。

祖先の靈を呼ぶといわれている“いたこ”（東北地方で口寄せする巫女）さん達が、テント張りの小屋の中で背を丸くしてうずくまっていた。いたこさんと対面して山を訪れたひとりの女性がうつむき加減で頭をたれ、口寄せの話に聞き入っていた。

口寄せとは、巫女などが神がかりになつて死者の靈魂を呼びその意思を伝えること（広辞林）で、生者に安らぎと生きる力を授ける。

青森県の下北は本州の

北端、恐山は国内三大

靈地（比叡山・高野

山・恐山）のひとつと

いわれている。火山帶

の山肌や、地面から噴

き出る硫黄のガスがあ

たりを掩い鼻を突い

た。



青森県、下北の恐山

為、皇族や貴族から厚遇された。地位や身分も保証され、経済的にも裕福となつた僧侶らは、漸次貴族化してゆく傾向を痛く批判し、仏教の原点にかえり真の佛教者道を追求したのが最澄や空海であった。

最澄の弟子の円仁は、その遺志をうけ「淨土往生」の道を説き諸国を歴したといわれる。

恐山に立つて想う時、現世は昔の象徴であることを実感する。そして山に接した静寂の湖、その湖を囲む青々とした山々がまさに淨土をしのばせる。今回の研修旅行恐山訪問は私の心奥に大きく内省迫るものがあったようだ。

（株式会社いのうえ 儀礼文化研究所所長）



三内丸山遺跡見学記念



後列左より 茂登山、鈴木、ニコレット、天野、浅井、二村、下村、杉浦（昌）、勝山
前列左より 荒木、伊藤、ミチコ、佐々木、杉浦（真）



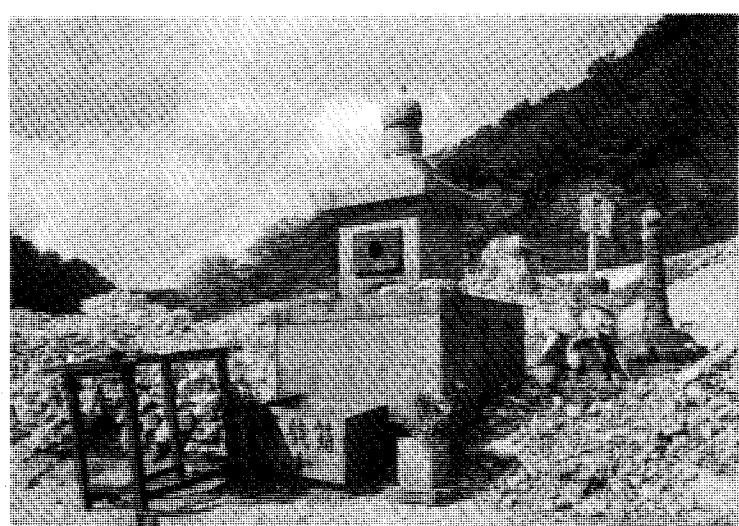
奇勝仏ヶ浦の奇岩・国定公園下北半島



靈場・恐山／極楽の浜



靈場・恐山／賽の河原付近



靈場・恐山／納骨堂



東北研修スナップ（1）

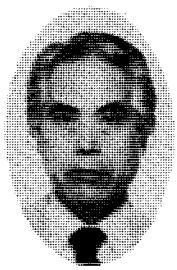


東北研修スナップ（2）



東北研修スナップ（3）

雑文 「葬送」



杉山昌司

細は、SOGIを読んでいただきたい）私も同感である。遺された者が「戚む」ということは、なにも血の繋りがあるなしでなく、逝った者が生前、相手に対して、どう接して来たかと言うことだと思う。相手を想わない自分勝手な気儘な人生であつたなら、その送られ方について、文句をつける資格はあるまい。

昭和五十四年に母を送った時、通夜・葬儀・火葬等の流れの局面で、なぜか心に満たされないものを感じた。これを機会に、自分の仕事にも絡

む葬送の「なにか」を探し続ける途中で、父を昭和六二年、葬文研定例会の日に、そして二年前に妻をと、希望した訳ではないが、遺族の立場を経験する羽目になつたのは、私の歳のせいだろうか。

最近、いろいろの立場の人達が葬送について、書いたり、喋ったりするようになつた。手探りで勉強し始めた一十年前に比べて隔世の感がある。死を見つめる延長にある葬送に、一般の人達も含め関心をもつことは、老若を問わず大切なことと思われる。

しかし、数多い情報の中には、興味本意、或は自己主張のみで、的外れと思われるものも多々散見されるが、情報の受売りではなく、取捨することが我々にも必要になる。云うは易いが、「葬送とは」を追い続け、その「なにか」を、未だ探し難い無能な男が、昔はテレビで葬送に関わった番組があれば、真剣に見たものを、偶々、朝のNHKテレビで取り上げていたものを、家の合間に、横目でチラチラ眺めている怠惰な自分の姿に、嫌悪を感じる此の頃である。

最近読んだ（SOGI通巻五十号、葬儀の提言、立川昭一氏の文章のなかで、小説家、幸田家の話がいたく心に残った。葬儀というものは、露伴の言うように、「易わんより寧ろ戚め」につきる。傷む（悼む）心さえあれば、「自然のなりゆき」で「ちょうどいいところ」に落ち着く。（詳

り返せば、葬儀業者も、型式、演出と形だけを追うばかりから、「たた一度きりの葬儀だから、司会、その他失敗は絶対に赦されない」等の、堅い決意をよく聞かされるが、無いにこしたことはないが、人間に失敗は付き物であつて要是その時の「遺族の戚み」を考えて、行動しているかどうかに掛かっていると私は思う。

遺族の立場を経験した私の意見は、一生懸命の上で、台詞や名前を間違えたとしても、些細なことで、葬儀の本質は、そんなところにあるとは考えていいない。そんなことで、いちいち文句をたれる輩は、たぶん成仏できないであろう。

近頃、二年前の妻の葬儀の写真を見るにつけ、態度、千キロの遠方から、顔を見るがために駆け付けていたいたい妻の友人、自分の死を半年後に控えながら、柩の前で、心から戚んで下さった、すでに故人になられた妻の友人、地元を離れ、東京での夕方から始まつた葬儀に、主婦の娘場でありながら会葬に立ち会つていただいた妻の友人達、私の戚みに、いろいろと気を配つて下さった、大勢の会葬者の皆さん、それぞれの想い出は、私なりに、葬儀の「なにか」を、ちょっとだけ垣間見たような気がするが、それは私の不遜であろうか。

（あすか建築構造事務所）

高齢者医療ケア施設とまちづくり他



岩 崎 孝 一

江東区南部の東京都立高齢者福祉、医療の複合施設の建設がスタートしています。この施設は320床の高齢者専門病院と200床の老人保健施設3年課程320人が学ぶ看護専門学校及び医師、看護婦職員住宅棟で構成されるものです。更に区が設置運営する高齢者在宅サービスセンター及び在宅介護支援センターが設置される計画です。

私の関わりは今年度2月より始まった、当施設の乗降駅となる東西線南砂駅前及び周辺の再開発計画と平成10年7月より設計業務となつた都砂町水処理センターの改修設計を委託されてからで各々別個と思われた件が、全体像を眺めた時、直前の高齢化社会への突入対策の一大プロジェクトである事でした。病院は痴呆性高齢者対策、総合ケア施設機構のモデル施設を目指しており、周辺再開発計画は、健康な高齢者と病気がちな高齢者、及び施設ケア対象高齢者、それを介護する人々、元気な子供達が一緒に集う、スポーツ休憩ゾーン、実に駅前機能の拡張が最大テーマです。今まで雑草に覆われていた広大な敷地に施設が出来る為に、都市機能を維持する処理場施設増強計画としての改修工事が全体をまとめるものです。

水処理センターはゆったりとした自然があり、東京でも珍しい植物が育ち、この地域で見られる植物の本を提供している位の地域です、今ここで建築物（一般）の劣化調査では使用されない最先端の調査機器が調査改

修設計に生かされています。ここまで述べると、高齢化対策施設のモデルはバラ色のようであるが、充分な研究と利用対策、介護討論を重ねないと、唯の箱物を造っているに過ぎない建築技術者の落し穴が潜んでいます。

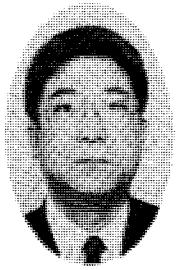
専門相談、診断、治療、看護、介護のケア過程で得られたノウハウの提供、ケア技術の地域還元が施設の任務である事から、生かすも殺すも、（葬文研にはこの表現が合っている？）介護専門員、ホームヘルパー、極端な表現では健康な人全てが介護サービス者の観点で活躍するかに掛かっている事です。ところが今の日本は全て不十分であります。

『スウェーデンの高齢者ケア・絶えざる改革と未来への模索』という本を読んで、この中で高齢者は家族とホームヘルパーの両方の手助けを受けることが多く、施設に入る前には家族が十分に面倒みているのが普通で、さらに多くの助けが必要であれば、家族とホームヘルパーの両方に頼るとあり、又、痴呆性老人に対しては増加傾向にあるのに、適切な配慮をする準備もできず、人員もいないのが現状である。外国ですらこの状況で、わが国では恐ろしい程の状態となるのではないか。

厚生省は標準的な在宅サービスを掲げ、介護計画を立てているが、社会的孤立と仕事からも追放状態のリストラ日本に於いて、葬文研に集う人々は、裕福な高齢者、痴呆老人、貧困老人等全ての最後のお世話をする業務の人も多く、在宅ケア、施設ケアの移送サービス食事サービス。安否通報と4時間サービス等々も業務範囲の一部と考えて、葬送直前も取組む体制が出来てこそ、将来の葬送の姿となってくるのでは。

（株式会社吉妻設計）

靈柩運送事業の責務とは



村田和隆

現在はその社会的経済的生活環境が複雑多岐、かつ流動的であるだけに現代人として人らしく、人並みに生きていこうとのマイナス要素、欲求不満要素は所謂不快、不平、不満、悲嘆、困難等となって実生活のいたる所に日々存在しています。加えて生活環境の重要な因子である自然環境は、科学技術の急速な発展によって汚染破壊され、人の自然人としての生き方に大きなブレーキをかけています。しかし、どんないやらしい、抵抗の多い生活環境の中であっても、古今、洋の東西を通じ、生活様式、習慣、宗教等を超えて最もつらく、最も痛手となるいやらしいものが自分を含めての身近な人の死ではないでしょうか。その人の死というものが絶対的な前提となつて葬祭業務の仕事が発生していることを先ず第一に認識しておかなければならぬはずです。

靈柩運送は仕事が発生してから終了まで、葬家に直接かかわっている時間が、葬祭事業者さんと比較にならないほど短時間の業務ですが、靈柩専門事業者としては、葬祭事業者さんからご注文を頂くので、その葬儀がどのような状況下で行われるのかは判断できません。従つて、あらゆる状況に対応すべき業務のノウハウをもたなければならず、その責務も重大になるのは必然です。

それでは靈柩運送の特質とは何かというと――――。

1. 灵柩運送事業は全て法に基づく運送事業となつております。しかし、運送する客体がご遺体であり、法律上では「物」と扱いされますもの、その取扱いについては、刑法や墳墓に関する法律等で、手厚い保護が必要な、人でもない物でもない「尊厳性のある特別なもの」と規定されています。それだけに肉親、ご遺族にとっては何ものにもかえがたい貴重性、尊厳性を内臓している事を認識しなければなりません。

2. 灵柩運送事業は一般貨物自動車運送事業となつております。しかし、運送する客体がご遺体であり、法律上では「物」と扱いされますもの、その取扱いについては、刑法や墳墓に関する法律等で、手厚い保護が必要な、人でもない物でもない「尊厳性のある特別なもの」と規定されています。それだけに肉親、ご遺族にとっては何ものにもかえがたい貴重性、尊厳性を内臓している事を認識しなければなりません。

3. 人生最後の重要な葬儀儀式においては、その重要な部門である「野辺の送り」を担当しているのが靈柩運送業務であります。従つて、伝統的な宗教習慣、生活習慣等、地域ニーズに適応した多種多様な特殊車両の整備、配置とともに、作業姿勢、接客態度、儀式性に即応したノウハウを要求されるのは当然です。

4. 反復不可能の絶対性（運送依頼の頻度と一時性）という要素です。

私たちの仕事は、日常茶飯の作業であつても、依頼者にとっては何十年に一回の依頼であることを忘れてはなりません。しかもやり直し、繰り返しのきかない仕事であり、当然その接客態度、作業姿勢は依頼者の「心」に対応したものでなければなりません。又、客体の尊厳性から考え、他の輸送機関（ビジネス、レジャー）とは異質なものであることを認識し、如何なる手抜きもミスも人間の死の尊厳をも傷つける不敬があつてはなりません。

以上、この4つの要素が特質としてあるのではないでしょうか。

この4要素は、靈柩運送の専門事業者であろうと、兼業者であろうと、

靈柩運送の業務に携わる人は絶対に忘れてはならないはずですし、事業者はこの4要素を事業方針の中に取り入れ、より一層の運送サービス向上に努力していくべきではないでしょうか。会社が社会での存在価値を確保するには、「現場での評価が決定的瞬間である」との信念から、業務遂行にあたっては、依頼者へのこれが最後という深い気持ちでの接触が貴重であるとの認識を持つてしなければなりません。又、その積み重ねが業務の向上にもつながるはずと思っております。

(東礼自動車株式会社)



針 生 秀 一

「セルフ・リストラクチュアリング」

いかがでしょうか？

先ほど厚生省がまとめた1998年人口動態統計の概況では、昨年1年間の自殺者数、離婚件数は過去最高となつたと報じている。自殺者数は前年比で35%も急増し、初めて3万人を突破。特に40～50代男性の自殺が増えているという。また、離婚件数は24万3102組で、同じく過去最高で前年比で9・2%の大増幅である。

その理由は一口に断定はできないが、やはり不況の影響は否定できない。

特に愚行とも思える日本のリストラは、本人のみならず家族をも巻き込んで、平穏だったはずの日常生活に暗い影を落としている。その中でも、父

△北米2位の葬儀大手、ローウェン破産△

北米2位の葬儀大手、ローウェン・グループは6月2日、米国とカナダの破産裁判所に破産法の適用を申請した。90年代半ばから拡大戦略を推進してきたが、資金繰りが悪化した。ローウェンは2億ドルの緊急融資を取り付け、事業を継続する。積極的な墓地買収戦略が裏目に出た模様。ローウェンは現在、米国とカナダで1500カ所以上の葬儀場や墓地を管理している。

△嫌われた巨大葬儀社△

アメリカの大衆の8割が巨大葬儀社よりも地元の葬儀社（斎場）を評価していることがわかった。FFA（家庭斎場協会）が5月に実施した調査によると、葬儀料金は世界にチエーンをもつ大手葬儀社が経営する葬儀場の方が高く、また買収した地域の個人葬儀場についても、昔のままの名称を使用して、経営者が変わっていることを公にしていないことに消費者は不審を抱いており、地元の家族経営の葬儀社を信頼するという結果が出た。世界第1位の複合葬儀社であるサービスコープレーションの売り上げ減少やローウェン・グループの破産は、厳しい消費者の鉄槌のせいかも知れない。

葬儀大手2社について次のように伝えていく。

親のリストラにより授業料を払えず学業半ばで退学を余儀なくされた子供達のニュースを聞いた時、はつきり言ってショックであった。これから彼らは何を信じて生きて行くのだろうか？少なくとも言えるのは、これを機に、彼ら（または彼女ら）は二度と「イエ」には束縛されないだろうということである。イエの分裂であり崩壊の序曲である。

これらのこととは、ますます葬送のあり方に大きな影響を与えるものであることは容易に想像がつく。

新しい時代の波は、ことごとく、砂上の楼閣を洗い流して行く。果たして、何者もこれらを逃れることはできないのだろうか。

一時期“黒船来航”ということで、米国の巨大葬儀社が日本に上陸を日論んでいるのではないか、という噂も流れた。しかし、本当に脅かしているのは、海の向こうの巨大な影ではなく、自らにまとわりつく、巨大な影のような気がしてならない。

時代はすでに売り手市場から買い手市場へ移行しているにもかかわらず、昔の古い成功体験をそのまま引きずり、いまだに旧態依然の古いシステムを消費者に押し付けようとしている。それは、使い古した刀をむやみに振り回し、やがてその影を生み出した自分自身を傷つけることにも気づかずに……。

今、必要なのは、過去の経験を捨て去り、もう一度、現在の消費者がどのような立場にさらされているのか、自分の足を使って、自分の目で見て、感じることではないだろうか。

青少年、中高年の自殺の増加。孤独死。高齢介護夫婦の安楽死願望、そして殺人。目を覆いたくなるような惨状。マーケットの構造はすでに変化している。いや、毎日そのスピードを増しているようにさえ感じる。

現代は、占星術的に見ると、ピッセス（魚座）からアクウェーリアス（水瓶座）の時代に入っていると言われる。これは宇宙自体の周期律が変化し、地球や人類に大変化を及ぼすというものである。過去2,500年に建設された文明をことごとく破壊し、協力と統一によるあらたな精神文明建設へと人類を駆り立てるものであるといわれる。過去に例を見ない、大企業の倒産や、金融破綻等を見る時、その説を安易に否定できない。

まさにこの時代のために書かれたとも言える『アクエリアン革命』という本の中にこうある。

「新しい文化の形成は、集団の力を借りて行われるものでもなければ、戦略を必要とするものでもない。それは発想法そのものである。それは根本的に新しい発想であり、右寄りでもなければ、左寄りでもない」

「古い考えのもとで利益を得てきた人々は、感情的にも習性的にも古いものに引きずられる。そして自分の信ずるものを捨て去ることなしに、永遠の眠りにつく者が多い。こういう人々は、目の前に証拠を山のように積まれても、もはや通用しない己れの真理にしがみつく」と。

なんと強烈なことばではないか。そして最後にこうある。

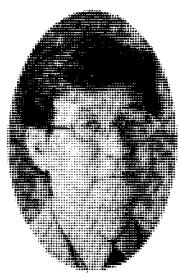
「新しい次元に立てば、昔のつまらぬ迷いは一瞬のうちに消え去る」と。

これらを考えるとき、会社のリストラの前に、経営者自信、いや私たち個人個人、自己の再構築＝セルフ・リストラクチャリングにこそ、力を注がなければならないのではないだろうか。

（セキセー株式会社　社長室）

*注：「セルフ・リストラクチャリング」は私の造語ですので、あしからず。

◆私感・現代葬儀環境を考えてみる



二 村 祐 輔

これは・・・

消費者向けの講演が、以前に比べると増えてきた。

それは葬儀に対する不信や不安がもとになって、関心を高めたと云つてよい。自分の講演では、いつも参加者との対話の場を設けることにしてはいるが、多くの市民から共通して感じられる現代葬儀についての「感触」を感じたままご報告したい。

それを語っていくのに、これまでの葬儀觀を「汽車」に、現状の感触を「自動車」に例えてみた。

昔の葬儀・・・（昔と云うよりも「家」や地域共同体が中心になつて行つてきた葬儀） 汽車に例えるとすれば・・・

形 態

葬儀に当てはめると

道路の選択も自由に
エンジンの構造も知らないまま
そのボディの形状や色合いにこだわり・・・世間体や自分なりの（自分勝手な）感覚にこだわり
出来れば伴走の車も必要なく
目的地を定めることなく
見定めることなく

・・・しきたりや慣習に忠実に
機関車を原動力として
地域共同体がリードして
いろいろな客車をつなぎ合わせ
者一般など、絆や義理を連結
する

駅を出発した。
駅としての「お葬式」が営まれた。
定められた目的地を目指して
して出発させるために始発駅
は・・・
「成仏」という目的地を目指す
靈的な恐怖感やケガレの觀念から、そのレールを逸脱することの無いよう、全員が協力して、その助力や監視することを義務とした。
今の葬儀・・・（葬儀をしない。あるいは自分なりの葬儀などという風潮）自動車に例えるとすれば・・・

これは・・・
いろいろな客車をつなぎ合わせ
者一般など、絆や義理を連結
する

サービスを利用して

わけもなく猛スピードで走り出す。・・・ 慌ただしさと無意味な忙しさの内に、いつの間にか終わっている葬儀。

そのために・・・

どうも、自動車の大小を問わず、燃費や経済性の悪いのが露骨に現れ、（多大な支出を余儀なくされ）考えさせられるようになってきた。

中には、そのため車を走らせるなどを無駄、非合理的と考えるようになり、あえて車を出すことを取りやめようとする（葬儀をしない）人まで現れた。

レールにしろ、道路にしろその帰着点が「成仏」や「往生」にある観念も希薄になり、運転することの煩わしさや標識の見方（靈的な警告）を認知する知恵の意味や知識の伝承を断絶させ、次世代へも継承しなくなつた。敷設されたレールのみならず、目的地への道筋さえも消滅させ、おおよそ善とされる合理的な考え方の中で、日常と非日常のケジメや区別に対する「文化的伝承」も消えかかっている。

「忌み」や「浄め」を悪感覚として、これを払拭させることが現代的であるかのような風潮が、ホテル葬や無宗教などのお別れ会を見ると多く感じられる。

今日に至って、いろいろな人生的節目（通過儀礼）もファッショナ化、レジャー化して、その本質的な意義や意味を無視したような行いこそ時代のトレンドとして軽薄短小化の波が、葬儀業界にも当てはめられている。

「自分らしい葬儀」を唱える人の多くは、個々の勝手な判断で、極めて狭義なポリシーから発想されているモノが見受けられ、またそれを賞賛する傾向まで見られる。

他界觀の欠如から、科学的な根拠と即物的な事実現象の把握のみで処理される社会が、いかに殺伐とした空気を漂わせるか、将来に憂いを託す。

そういうた要因に感じられるもののなかで、特に既存佛教の荒廃が目につく。

「死」を語るに「宗教」は無くてはならない心の要求であるとするならば、在來の日本佛教の現状は、いたたまれない状況にあると云つてよい。少なくとも、是正の道を見いだすとするならば、今は日本人の民俗意識の本質を模索し、基層的な心理を満足させていく手法で死や葬儀の取り扱いを望みたい。

私たちにとつての死生觀は潜在的に持つ靈魂觀を必ずと云つてよいほど踏み台にしている。けれども、直截的な言葉でこれを語るには勇気がいる。

科学的な世の中だという自負と認識が、それを嫌う風潮がある。と、すれば、さりげなく葬儀の場に置いて、視聴覚的な構成配置や扱う葬具のもつ意味から、それが何のためにあるのかを解説することなど、葬祭業者をはじめとする関係者サイドからの働きかけが必要ではないかと考える。

葬儀にたずさわる人々は、喪主や会葬者という実存をサービス対象とするのではなく、第一義には「目には見えない存在」へのサービスを構築しなければならないのではないかと思う。

「葬送の文化」は施設や現況を把握するだけでなく、何気なく為されている、語られることのない伝承の行為や所作の意義や意味を考え、それをどう継承していくことができるのかを思考しなければならないと思う。

伝えてこそ「文化」としてなり得る。

（葬送文化研究会・事務局長）

葬送文化研究会 会則

平成9年1月

役員

第8条 本会には、次の役員を置き、原則として会員の中から選任する。

- | | |
|-----|--|
| 第1条 | この会は「葬送文化研究会」(略称「葬文研」)。以下本会といふ。) |
| 目的 | (1) 会長1名
(2) 顧問若干名
(3) 幹事15名以内
(4) 事務局長幹事の中から1名
(5) 会計幹事の中から2名
(6) 監査2名 |
| 第2条 | 本会は各種の事業活動を通じて、会員相互の交流を元に葬送文化への关心と理解を深めることを目的とする。 |

- 本会は、前条の目的を達成するために次の事業、活動を行う。
- (1) 会員相互の経験、知識及び意見の交換による研究
 - (2) 研究会、講演会等の開催
 - (3) 刊行物の発行
 - (4) その他前条の目的を達成するための必要な事業

事業

第3条

- 本会は、個人会員、法人会員とし、ともに会員とする。
- 本会の運営役員は原則として会員より選出する。
- 会員は規定の会費を納めなければならない。

第4条

- 会員は、本会の各種資料等の利用が要請によって出来る。
- その都度参加費を徴収します。

第5条

- 会員になろうとする者は、所定の会費を添えて、入会申込書を事務局宛に提出し了解を得なければならない。

会員

第6条

- 個人会員は年会費12,000円とする。

- 事業活動参加は記名本人に限定される。

- 法人事業活動参加は年会費25,000円とする。

- 会員は、記名企業名の社員であれば無記名にて2名まで参加できる。

- その都度参加費を徴収します。

総会

第7条

- 総会は次の事項を議決する。

- (1) 会則の制定及び変更

- (2) 役員の選任

- (3) 事業計画及び事業報告

- (4) 予算及び決算

- (5) その他、事業及び会の運営に関する重要な事項

- 総会(定期及び臨時)は会員総数の出席をもって成立し、

- この場合、委任状を提出したものは、出席とみなす。

- 定期総会は、毎年1回開催する。

- 臨時総会は会員の要請にて会長が召集する。

職務

第9条 任期

- 役員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

退任

第10条

- 役員は会員の中から選出され総会の決議を元に承認されることとする。

幹事会

第11条

- 「会長」は本会を代表し、本会を統括する。
「顧問」は会長、事務局長、及び幹事会より、会の運営に関する助言が求められた場合にこれに応ずる。
「幹事」は本会の運営に加わり、その職務にあたる。
「会計」は本会の收支を管理する。
「監査」は決算報告並びに事業報告を精査し、定例総会他、会員の要請による臨時総会時にその結果を報告する。

幹事会

第12条

- 幹事会は、幹事により編成し、本会の事業の運営にあたる。

事務局

第13条

- 本会の事務を処理するため、事務局を設置する。

退会

第14条

- 退会しようとする会員は、事務局あてに届出をする。

除名

第15条

- 以下の各項、何れかに該当する事を由として会員の除名を行なうことが出来る。その際、総会での議決を経て、その旨を当該会員に通知する。

- A : 会費等の未納状態が続いている者。
- B : 自らの業務を目的として他会員に対する働きかけの甚だしい者。
- C : 本会の名誉を著しく損なった者。
- D : この他、本会及び本会各員に対して問題があるとされる者。

事業年度

第16条

- 本会の事業年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

会計年度

第17条

- 本会の会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。

雄則

第18条

- この会則規約は、平成9年4月1日より施行する。

2項目

- 3項目

- 4項目

葬送文化研究会会報 (第2号)

発行 葬送文化研究会
会長 天野 勲

事務局
〒102-0081
東京都千代田区四番町6-3-311
TEL03-5215-5767
事務局長 二村祐輔

発行日 平成11年9月1日

編集 杉浦昌則 上村 聰 勝山宏則

印刷 日新社写真製版所